第３節　歴史的背景

３－１　先史

大分県内では、今から３万年以上前の旧石器時代には人が生活をしていた痕跡が見つかっており、獲物となる動物を追って移動を繰り返す生活が営まれていた。およそ１万２千年前に土器の使用が始まり、集落を作って定住するようになる。

図 1-24　森の木遺跡

本市域では、堅田川沿いの森の木遺跡（佐伯地区長谷）で、旧石器時代の終わり頃から縄文時代早期（およそ 9,000 年前）までの生活の跡が発見された。早期では住居や調理施設の跡とともに、当時の瀬戸内・東九州一帯で使われた押型文土器や姫島（姫島村）産の黒曜石などが出土し、広い範囲で物や情報が行き交っていたことがわかる。この他にも山間部を中心に、川に面した台地上に各時期の縄文土器や石器が見つかっており、狩猟や採集によって豊かな自然の恵みを利用し、多くの集落が営まれていたと考えられる。

およそ 2,500 年前には、中国大陸から伝わった稲作が日本各地に広まり、弥生時代へと移り変わった。本市域では、下城遺跡（佐伯地区長谷）や白潟遺跡（佐伯地区若宮町）など河川下流の低地で貝塚を伴う集落跡が見つかっており、稲作をしながら採集の比率も高かったようである。反面、山間部の台地上に営まれた源六原遺跡（直川地区下直見）では稲作に関わる石器が出土せず、畑作と狩猟・採集による生活を営んでいたと考えられる。稲作や畑作とともに狩猟・採集が依然として盛んであったことは、山海の産物に恵まれた、本市域の環境を反映するものと考えられる。

３－２　古代

３世紀中頃に畿内で成立した大和政権が、本州・九州・四国を勢力下におさめた頃、日本列島の各地に有力者の墓である古墳が造られた。本市域では、番匠川下流沿いの丘陵や、その河口に浮かぶ島に古墳が築かれた。いくつかの古墳では発掘調査が行われ、樫野古墳（佐伯地区上岡）では北部九州や宮崎平野の影響が見られる土器が出土している。このような古墳の立地や出土資料から、番匠川河

図 1-25　樫野古墳

ロー帯を支配した有力者が周辺地域を治めていたと考えられる。

８世紀になると、天皇を中心とした国家体制が整い、地方は国・郡・里に分けて治められた。奈良時代に書かれた『豊後国風土記』によると、佐伯地域の海岸部には海人が多く住んでおり、それにちなんで名付けられた海部郡穂門郷の一部であった。また、漢字が書かれた土器が出土した汐月遺跡（佐伯地区長良）は、平安時代の歴史書『本朝世紀』に記される役所の佐伯院と推測されている。

一方、山間部の宇目地区は大野郡三重郷の一部であり、なかでも豊後国と日向国を結ぶ官道沿いにあった小野市には駅家が置かれ、交通や流通の拠点となっていたと考えられる。

３－３　中世

《佐伯荘と佐伯氏》

中世の佐伯地域には佐伯荘という荘園があり、豊後南部で勢力を誇った大神氏一族の佐伯氏が支配していた。鎌倉時代に作成された『豊後国図田帳』によると、佐伯荘は海部郡 831 町のうち 180 町を占め、さらに本荘 120 町と堅田村 60 町に分かれていた。佐伯氏は本荘・堅田村いずれの地頭（現地支配者）も務めている。

南北朝時代には、南朝方・北朝方の双方と関係を保ち、佐伯荘の支配を維持する。南北朝合一後は、豊後の有力武士とともに室町将軍に直接仕える小番衆（奉公衆）となっている。

《佐伯氏と大友氏》

鎌倉時代に守護として大友氏が豊後に入って以降、大神氏一族の多くは大友氏の血族となり、その影響下に組み込まれていった。しかし、佐伯氏は大友氏と血縁関係を結ばず、守護大友氏に対して独立性の強い立場を保った。そのため、大友氏は佐伯氏を他の豊後の武士に比べて別格に扱うとともに、警戒していた。

図 1-26　栂牟礼城跡（写真中央）

大永７年（1527）、佐伯惟治が大友義鑑と対立し、大友氏の侵攻を受けることとなる。惟治は居城の栂牟礼城（佐伯地区稲垣・弥生地区井崎）で抗戦の末に敗北し、日向（宮崎県延岡市）へ逃亡する途上で自害したと伝えられる。

惟治の死後も、大友氏の取りなしにより佐伯氏は存続し、引き続き豊後南部を治めた。弘治２年（1556）、佐伯惟教は再び大友氏と対立を生じて伊予へと逃亡したが、中国地方の毛利氏が九州へ進出してくると帰国し、のちに大友氏の加判衆の一員となって活躍した。天正６年（1578）から始まる、大友宗麟による日向侵攻にも従軍し、

高城川原の合戦（耳川の戦い）では主力として参戦したが、島津氏に敗れて戦死した。

惟教の跡を継いだ佐伯惟定は、天正 14 年（1586）に豊後に侵攻してきた島津氏を堅田合戦で破り、佐伯への侵入を食い止めた。また、米水津地区の民に対し、島津軍から湾岸を防衛した戦功を称える文書が与えられ、このことから佐伯氏は水軍を有していたと推測される。

領地を守った惟定だったが、文禄２年（1593）の大友氏改易に伴い、伊予の藤堂氏に仕えて佐伯の地を去った。

《佐伯氏の足跡》

佐伯氏の勢力は現在の本市域の大半に及んだと考えられ、各地には同氏ゆかりの史跡・寺社・石造物などが数多く残されている。また、佐伯氏の盛衰にまつわる伝承は、今なお語り継がれている。

佐伯氏は、鎌倉・南北朝時代に守護大友氏が豊後国内に影響力を強める中、佐伯荘で独自の力をつけていった。その拠点は佐伯地区上岡・稲垣にあったと考えられ、16 世紀前半には、上岡と弥生地区井崎に挟まれた栂牟礼山に栂牟礼城を築いた。栂牟礼城は、標高 224 m の山頂を主郭として、南に曲輪を配する大規模な城郭で、いくつもの堀切や竪堀を設けた堅固な山城であった。

図 1-27　栂牟礼城下の復元想像図

また、城の東麓には家臣の屋敷や寺社、市場などからなる城下集落が形成されていた。城の山裾では、発掘調査により戦国時代の大規模な建物跡が見つかっている。さらに、麓にある古市遺跡（佐伯地区上岡・稲垣）では、鎌倉から室町時代にかけての遺物が出土している。遺跡の周辺では番匠川と門前川に挟まれた自然堤防上に短冊状の地割が見られ、「古市」の地名が残ることから、河川交通の要衝として市場が開かれていたと推測される。また、周囲の山の尾根には寺社が建てられ、佐伯氏や集落の住民により信仰されていたようである。

一方、佐伯荘の中心部から離れた郊外にも、中世の山城や戦跡が多く見られる。これらの中には、天正 14 年（1586）の島津氏の豊後侵攻の際に、防御のために築かれたものもある。また、弥生地区上小倉にある磨崖石塔は、鎌倉時代後期から南北朝期に至る佐伯氏の供養塔であり、直川地区には佐伯氏の家臣である盛嶽氏が造立した石塔がある。この盛嶽氏の拠点は宇目地区にあったと見られ、佐伯氏の勢力は広く山間部にまで及んでいた。片や沿岸部の米水津地区では、水軍として活躍したと思われる米水津衆に佐伯氏が宛てた文書が伝わっている。蒲江地区には中世の石造物が残り、佐伯氏の影響下にあった有力者の存在がうかがえる。このほか、栂牟礼合戦で敗れた佐伯惟治を鎮魂する神社が本市から延岡市（宮崎県）に点在しており、佐伯氏の勢力圏の広さが想像できる。

３－４　近世

《佐伯藩の成立》

大友氏の改易の後、豊後は豊臣秀吉の直轄地となった。秀吉の代官・山口玄蕃と宮部継潤により検地が行われ、海部郡は垣見弥五郎と宮部継潤が代官として支配した。関ヶ原の戦い後、海部郡南部の２万石が毛利高政に与えられ、佐伯藩が成立した。佐伯藩の初代藩主 毛利高政は、永禄２年（1559）に尾張国苅安賀（現在の愛知県一宮市）で生まれたという。豊臣秀吉に仕えて頭角を現し、大友氏の改易後に日田・玖珠に所領を得て豊後に入った。関ヶ原の戦い後の慶長６年(1601)に佐伯に領地替えとなり、以後、江戸時代の約 260 年間、12 代にわたって毛利家が佐伯藩を治めた。

佐伯藩は、豊後水道に面する浦方と、平地の少ない山間部の農村を藩政の基盤とし、その領域は、宇目地区を除く本市の全域に津久見市南部を加えた範囲であった。

なお、佐伯藩の朱印高２万石のうち、２千石を高政の弟である吉安に与えていたが、のちに吉安領は幕府領となった。以降幕末まで、物資の運搬や用水路についての争いが起きるなど対立が続き、藩はその扱いに苦慮していくこととなった。

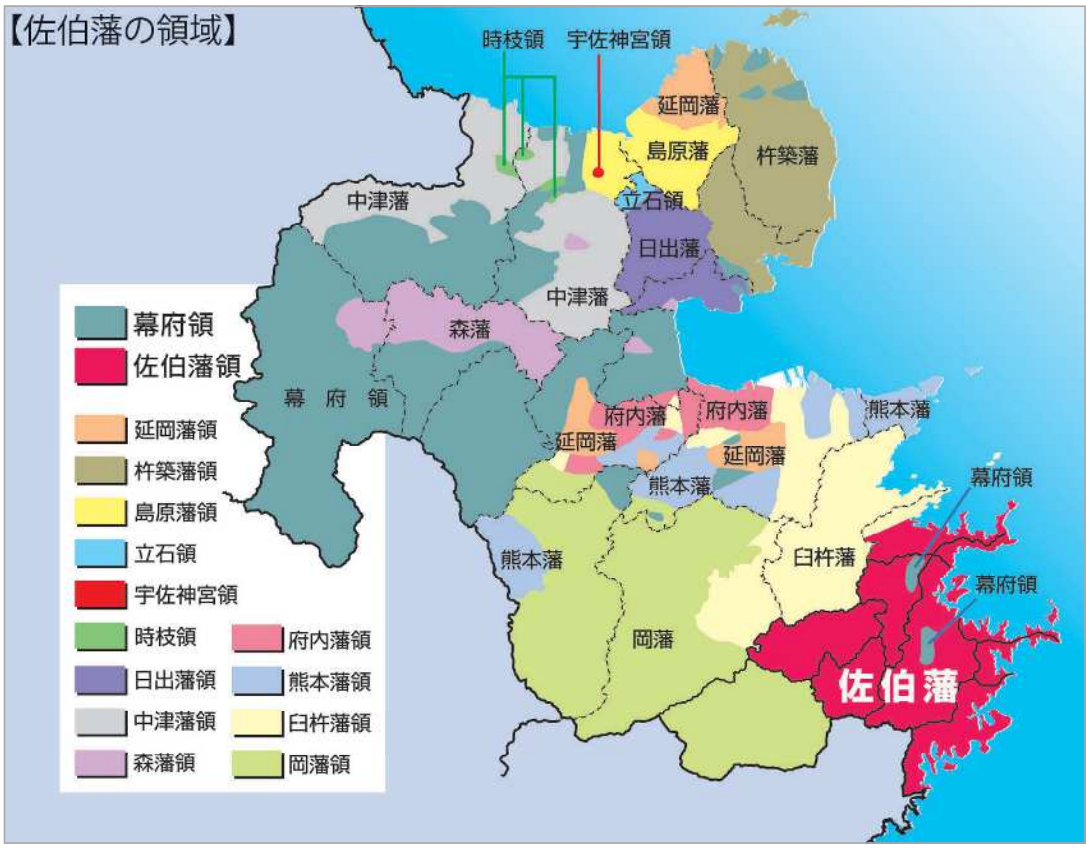

図 1-28　佐伯藩の領域

《佐伯城と城下町》

佐伯に入った毛利高政は、番匠川河口の八幡山（はちまんやま）（現在の城山）に居城として佐伯城を築き、その麓に城下町を建設した。城は慶長７年（1602）から４年をかけて築かれた。完成当時の城は、山頂の本丸・本丸外曲輪（そとぐるわ）・二の丸・西出丸・北出丸と、山麓の三の丸で構成されていたと考えられ、本丸には三重の天守がそびえていたと伝わる。三の丸は藩主の日常の居所であり、寛永 14 年（1637）には櫓門が創建、曲輪の形状が整えられたと考えられる。

図 1-29　佐伯城跡（城山）

佐伯城は近世には珍しい山城で、江戸時代を通して山頂部の城郭も管理されたため、近世初期の形態が良く保たれている。

城下町は城の南東、番匠川下流の沖積地（ちゅうせきち）に建設された。この地は、塩屋千軒（しおやせんげん）と呼ばれ、中世から続く製塩を生業とする集落があったと伝わる。北と西には八幡山があり、南は番匠川に囲まれた閉鎖的な地形にあること、また、中世に佐伯氏が居城とした栂牟礼城より海岸に近く、番匠川を利用した海上・河川交通に適した場所を選んだものと考えられる。

城下の町割は、大きく武家地と町人地に二分され、さらに町人地は商人の住む内町と、船頭が多く暮らす船頭町に分かれていた。いずれも通りで仕切られた長方形の区画を基本とし、その内部は短冊形の屋敷地に分割される。通りを挟んで向かい合う屋敷群が一つの町を構成する両側町の形態をとった。この構造は近世中期に整えられ、大きな変化なく現在に至り、今も道路や地名にその面影が良く残っている。

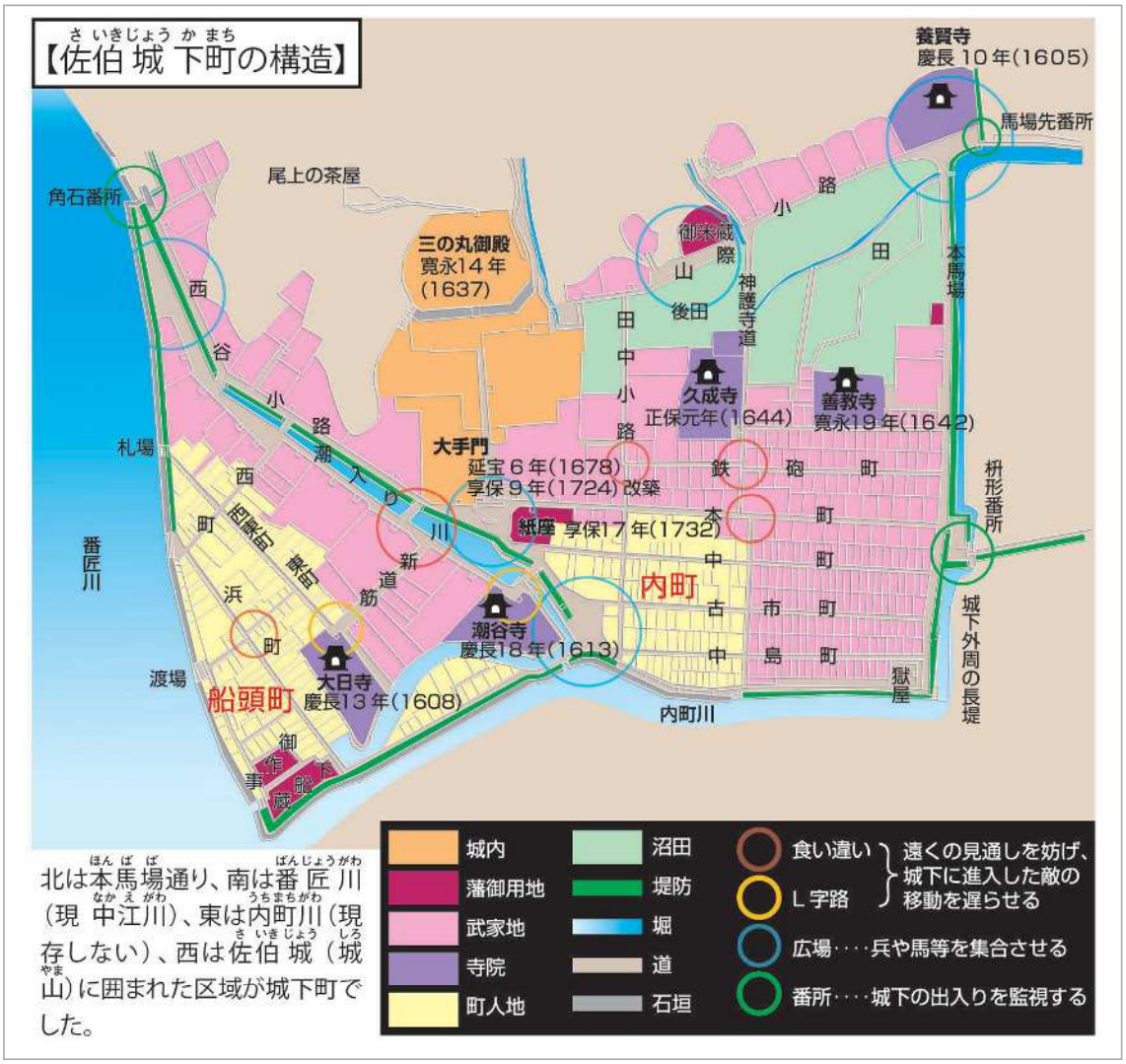

図 1-30　佐伯城下町の構造

《毛利家の治世》

佐伯藩では藩主家の異動もなく、治世は概ね安定していた。しかし、２代藩主高成から５代高久までは短命な藩主が続き、不安定な時期もあった。高成が急死した際には、叔父の森吉安（高政の弟）が高成の弟を擁立しようとして敗れ、佐伯藩内の領地２千石を幕府に返上する事件が起こった。

４代高重には子がなく、豊後森藩の久留島家から５代高久を迎えたが、高久にも子がなく、同じく久留島家から６代高慶を迎えた。

佐伯藩中興の祖と称えられる６代高慶は藩政の刷新を図り、火事や地震などの災害

で傷んでいた佐伯城を、宝永６年（1709）から19年をかけて修築した。さらには城下町の整備や、産業の振興に力を入れ、多大な功績を残した。

江戸時代中期には、灌漑施設の建設や新田の開発により、米の生産量が向上し、また、綿・漆・楮・茶などの商品作物の栽培が盛んとなり、藩財政を支えた。

８代高標は、学問好きの藩主として知られ、藩士の子弟の教育に力を注いだ。安永６年（1777）には藩校「四教堂」を設立し蔵書の充実に努めるなど、学問を奨励した。四教堂では、日田の広瀬淡窓を教えた松下筑陰や矢野黙斎など、優れた儒学者を教授として採用していた。漢学・和学・医学・兵学などの授業が行われ、のちに剣術の直心影流の稽古場が増設されて、文武に秀でた家臣を育成した。

また、高標は本の収集家であった。三の丸に「佐伯文庫」を開設し、その蔵書は８万巻（４万冊）にのぼったといわれる。膨大な数が注目されるが、高標は本の内容までも深く吟味していたという。鳥取の池田定常、近江（滋賀県）の市橋長昭とともに三大学者大名と並び称された。

文政10年（1827）、10代高翰は、幕府の命令で佐伯文庫の中から特に貴重な中国書約２万冊を献上した。現在、佐伯文庫は国立公文書館などに保管され、佐伯には幕府に献上されなかった書物が残っている。11代高泰の代からは、幕末の動乱により緊迫した藩政が続き、12代高謙の代に明治維新を迎えた。

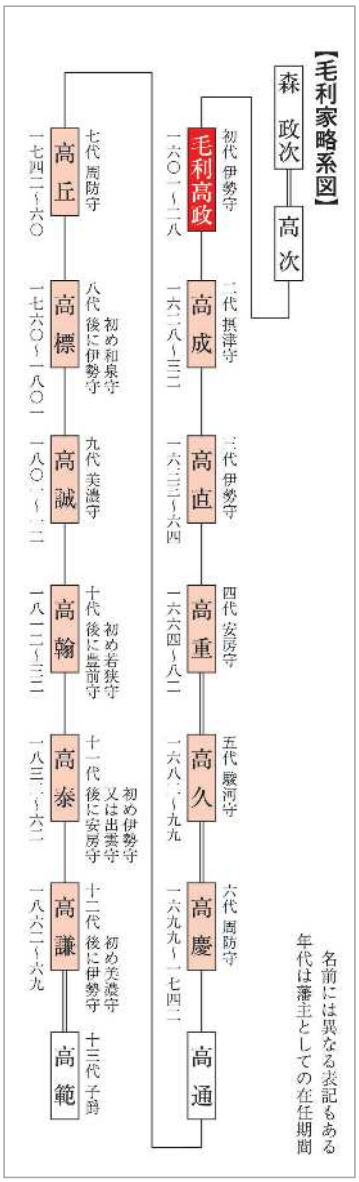

図1-31　毛利家略系図

《佐伯藩の農村と浦方》

城下町の整備が進む一方で、近世初頭の農村は、農民の逃亡などにより荒廃しており、労働力の確保と田畑の復興・開発に迫られていた。高政は佐伯に入部してすぐに、藩経営の基礎とするため、村々に検地帳の提出を命じ、各村の石高の把握に努めた。山林が多く耕作地が少ない農村では、少しでも生産力を向上させるために、農繁期の作業方法や、耕作地の取り扱いについてなど、農民と農地に関するさまざまな施策が藩によって行われた。

また、豊後水道・日向灘の海産資源に恵まれた浦方についても藩の成立当初から重視しており、漁業を安定させ漁民の定住化を図るため、浦方に対する振興策を積極的に打ち出していった。例えば、漁業権に対する優遇措置や、販売の自由などである。その他、芝居などの興行も許されていた。その一方で、藩は網・船・漁場などに課税し、安定した収益が見込めるようになった。「さいきの殿様 浦でもつ」という言葉が、しばしば近世の佐伯を表すものとして用いられるように、浦方の利益は藩の経済を支

える大きな役割を果たすまでに成長を遂げたのである。

18世紀に入ると、網漁の技術が向上するとともに、特産物の干鰯（鰯を乾燥させて作った肥料）の需要が増大し、干鰯生産は大いに進展した。19世紀に入ると、干鰯を専売品にして販売体制を整えた。大坂近郊など関西での綿栽培に用いられ、佐伯産の干鰯は非常に高く評価されるようになった。

このように藩の経営が展開する一方、実際に藩政を動かしていく家臣団の組織化も進み、藩の支配体制が形成されていった。

《佐伯藩と災害》

江戸時代には、城や城下町がたびたび災害に見舞われた。中でも大きな被害があったのは、宝永4年（1707）10月に起こった宝永地震である。東海道沖から南海道沖を震源とした大地震で、佐伯の沿岸部にも巨大津波が押し寄せた。記録によると、沿岸の米水津地区浦代浦には約11mの津波が到達し、20人の犠牲者が出た。また、城下にも津波が7度も押し寄せ、佐伯城内にまで到達した。藩は家臣や町人に山への避難を命じ、高台にある城内への立ち入りも許可した。

図1-32　現在の米水津地区浦代浦

この津波を教訓に、藩では今後の災害に備えるため、城下町の外にある中村（佐伯地区中村東・西・南・北町）に土手を約2か月で築き、享保4年（1719）には、城下町の外周全体を囲い込む土手も建設した。その後、安政元年（1854）の大地震で再び佐伯は巨大津波に襲われたが、宝永地震の教訓と大土手が生かされ、被害の拡大を防いだ。

《岡藩の宇目郷》

近世の宇目地区は、大野郡宇目郷に属し、岡藩に組み込まれていた。注目されるのは、木浦鉱山や尾平鉱山といった鉱山経営が行われたことである。採掘された鉛を、時の将軍、徳川秀忠や徳川家光に献上した記録が残っている。元禄期まではある程度採掘が行われていたようだが、その後急速に衰退していき、幕末には小規模な経営となったようである。しかし、銀・銅・孔雀石など多種多様な鉱物資源の採れる鉱山として、岡藩はその経営を手放すことはなかった。

また、宇目地区には重岡キリシタン墓や、切支丹柄鏡などキリシタンに関連した歴史文化資源が点在している。内陸の岡藩に属していたことで、佐伯藩とは異なる歴史文化が育まれた地域と言える。

3－5　近現代

《明治維新と佐伯》

嘉永６年（1853）、アメリカ大統領の国書を携えたペリーの来航は、それまで一部の国を除いて、海外との交流を制限してきた江戸幕府にとって衝撃的な出来事となった。アメリカは開港と交易を迫り、江戸幕府は対応に苦慮するも、翌年には日米和親条約を締結した。その後もアメリカのみならず、欧米諸国からの圧力によって、江戸幕府は対外関係を拡大する決断を下した。

こうした開国を巡る混乱は、やがて倒幕運動へとつながり、慶応３年（1867）に幕府は朝廷に政権を返上した（大政奉還）。その後、佐伯藩は新政府軍と旧幕府軍の間で態度を決めかねていたが、鳥羽・伏見の戦いで新政府軍が勝利すると、高謙は明治政府に従い江戸の藩邸を引き払い、佐伯に帰国した。

明治２年（1869）には版籍奉還（はんせき）が行われ、高謙は佐伯藩の知藩事（ちはんじ）に任命されたが、同４年（1871）の廃藩置県で佐伯藩は佐伯県（のちに大分県）となり、高謙は免職されて、およそ 260 年続いた毛利家の統治は終わりを迎えた。

《西南戦争の影響》

新たに発足した明治政府は、中央集権的な国家を目指して改革を進めたが、これに抵抗する反乱が続発した。明治 10 年（1877）、西郷隆盛が明治政府に不満を持つ鹿児島の士族を率いて立ち、西南戦争が勃発した。国内最後の内戦となったこの戦争では九州全土が戦場となった。佐伯の各地も戦場となり、本匠・宇目・直川・蒲江地区の街道に沿った尾根には、今も多くの台場の跡が見られる。特に宇目地区は５月に西郷軍が、６月に政府軍が拠点を置いた要衝で、現地には多くの記録が残っている。

この間、佐伯の各地では、西郷軍により金品・食料の提供や労働が強制される一方で、政府軍への協力が求められるなど、大きな負担を強いられた。

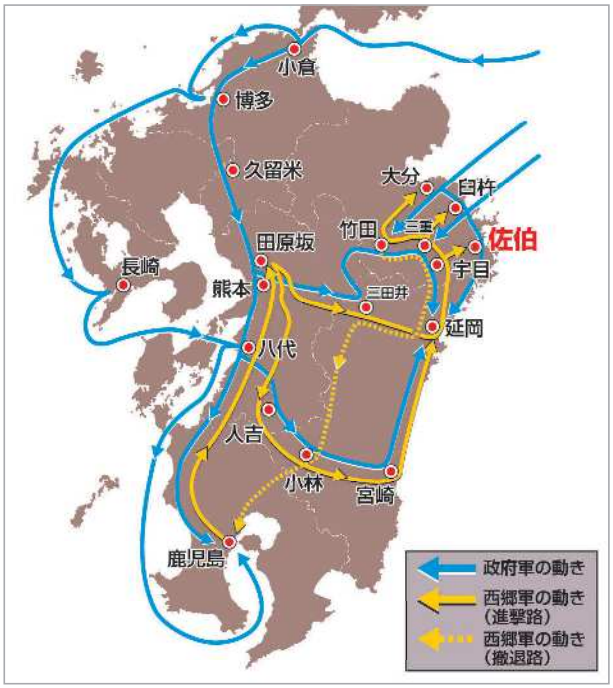

図 1-33　政府軍・西郷軍の動き

《近代のまちづくり》

明治 11 年（1878）、海部郡は蒲戸崎（かまとざき）を境に南北に分けられた。明治 22 年（1889）の町村制の施行により旧佐伯藩領は南海部郡１町 23 村、宇目は大野郡２村となり、現在の行政区割りの基礎ができた。明治期から、道路の整備が盛んに行われるなど、

近代化が進み、明治時代末期には電灯が灯され、電話が開始された。さらに、大正５年（1916）には、日豊本線が佐伯駅まで開通した。

《国木田独歩が愛したまち》

のちに作家として活躍する国木田独歩は、明治 26 年（1893）10 月に教師として佐伯に赴任した。滞在中は、城下町に建つ坂本家住宅（現 城下町佐伯国木田独歩館）の２階に弟の収二ともに下宿した。学校で教鞭を執る傍ら、城山（佐伯城跡）をはじめ、精力的に市内各地を散策したといわれる。わずか 10 か月余りの滞在期間であったが、佐伯のまちは独歩にとって印象に残ったようで、のちに『春の鳥』『源おぢ』『鹿狩』など、佐伯を舞台とした小説を発表している。

図 1-34　旧坂本家住宅（城下町佐伯 国木田独歩館）

《軍都 佐伯》

瀬戸内海へ続く豊後水道は、国防上重要な位置にあった。かねてから、陸軍は佐賀関（大分市）と佐田岬（愛媛県）を中心とした沿岸部に砲台を築くなど軍備を整えてきたが、大正 12 年（1923）に佐賀関に本部を置く、豊予要塞を構築した。さらに鶴御崎、水ノ子島、日振島を結ぶ線上には、軍事施設が整備され、佐伯沿岸部にも砲台が配備されることとなった。

図 1-35　佐伯海軍航空隊庁舎

一方、海軍も明治時代末期から佐伯湾で演習をしばしば行っていた。このような経緯から、昭和に入ると佐伯は、九州沿岸に建設する海軍航空隊基地の候補地に挙がり、昭和６年（1931）には航空隊の設置が決まった。これにより、上水道の敷設や道路改良などのインフラ整備が進み、昭和恐慌以来落ち込んでいた町の経済に活気を与えた。

昭和９年（1934）には、佐伯海軍航空隊が開隊し、次いで昭和 14 年（1939）には、豊後水道を警備する佐伯防備隊が開隊した。こうした軍施設の設置をきっかけに当時の佐伯町と周辺の町村は大いに発展し、さらなる経済強化と行政区拡大のため行われた昭和 12 年（1937）と昭和 16 年（1941）の町村合併は、佐伯市誕生の契機となった。

日中戦争の勃発以降、アジアへの影響力を強めた結果、日本が徐々に国際社会から

孤立していく中、昭和16年には、真珠湾攻撃に向けて、佐伯湾から連合艦隊機動部隊の一部が発進した。この攻撃を機に日本とアメリカの戦争が始まった。

しかし、戦局が悪化した昭和20年（1945）3月以降、海軍基地が置かれた佐伯はたびたびアメリカ軍の空襲を受けた。軍事施設への攻撃のみならず、市街への空襲により一般市民も多数犠牲となった。中でも同年4月26日の空襲は、中心市街地にも大きな被害をもたらし、犠牲者も多かったことから、戦争の悲惨さを伝えるものとして、今もなお語り継がれている。

《戦後の佐伯》

戦後、旧海軍跡地などの臨海部に港湾整備が図られ、合板や造船、セメントといった基幹産業が進出し、県下でいち早く工業都市として発展した。その後、昭和48年（1973）のオイルショックの影響を受け、経済は低迷していく。

しかし、メカトロニクスや業務用冷蔵庫、医療機器などの製造分野で、全国的に高いシェアを持つ企業が増え、市の経済を支えていくこととなる。

水産業は、江戸時代からの本市の主要産業の1つであり、現在でも県下で高い生産量を誇っている。

平成17年（2005）3月、市町村合併により新佐伯市が誕生し、新たなまちづくりがスタートした。市役所の庁舎は旧佐伯市に置かれ、旧町村の役場は、振興局として各地区を所管することとなった。

これまでに主要な施設の整備が進んだことに加え、平成26年（2014）に佐伯港の水深14ｍ岸壁が完成、平成27年（2015）には待望されていた東九州自動車道が開通した。主要都市との移動時間の短縮による交流、産業や経済の活性化に期待が高まっている。

図1-36　現在の本市中心部